

企画2 グローバル化するポピュラーカルチャーと パネリスト 森川嘉一郎
国際文化学

Kaichiro MORIKAWA

●明治大学国際日本学部准教授
(現代日本文化・意匠論)

国際マンガ図書館の文化学

+ 明治大学では、2014年度を目処に、マンガ・アニメ・ゲームの複合アーカイブ施設「東京国際マンガ図書館」（仮称）の設立準備を進めている。2009年10月には、その先行施設となるマンガとサブカルチャーの専門図書館、「米沢嘉博記念図書館」がオープンした。本稿では、明大内でこの計画に関わっている筆者の立場から、マンガ、図書館、大学、そして政府の関係に焦点を合わせてみたい。

まずは、四者の関係を大雑把にまとめてみよう。近年、マンガやアニメが海外に輸出される日本文化の大きな一画を占め、権威的な賞を獲るようにもなった。そのような状況を受け、政府はこれらを有望な「コンテンツ産業」と位置づけ、いくつかの大学では教育・研究の対象にしはじめた。そしてそうした大学の中には、マンガの図書館を設置する箇所も現れるようになった。「マンガ学部」を擁する京都精華大学が「京都国際マンガミュージアム」を設立し、マンガやアニメも扱う「国際日本学部」を新設した明治大学が、これに続く形となった。

他方、この流れはさまざまな矛盾を内包している。その矛盾は、例えば「大学付属のマンガ図書館」といったときに、ある種の違和感が否応なく呼び起こされることに表れている。そしてその違和感は、「アニメの殿堂」や「国営マンガ喫茶」といった、麻生政権下で打ち出された「国立メディア芸術総合センター」計画を、当時の野党が批判する際に繰り出したフレーズにも通底している。それは、どういうことか。

そもそも、大学でマンガを教えるということ自体、いぶかしむ向きが少なくない。とりわけ年配の人であれば、「そんなものは大学で教えるに値しないのではないか」という印象を持つ人が多い。マンガは一般的な大衆文化よりもさらに下位なものと思なされてきたのだから、これは自然な反応ともいえる。

では逆に、マンガ家やマンガ愛好家の人たちであれば、大学で扱われることを快く思うのかといえば、そうとも限らない。歓迎する人々もいる一方で、「大学で教育して面白いマンガが描けるようになるのか」「アカデミズムによって権威付けられるとサブカルチャーとしての活力が失われるのではないか」などといった、冷ややかな意見もしばしば耳にする。

この、一見立場を異にする二つの懐疑論は、大学がある種の権威であることを強調し、そこに立脚しているという点で共通している。大学のような権威的な機関に、マンガやアニメのようなものは、馴染まないのではないか。そのような違和感に、集約することができるだろう。

では、大学の側は、マンガやアニメの学科化を、どのように根拠付けているのか。入学案内や大学のホームページから、拾ってみた。

「我が国におけるアニメーション表現の独自性を国際的な視野から評価」（東京藝術大学大学院アニメーション専攻）「世界中から高い評価を得て、いまや国家的なプロジェクトにも取り上げられる日本のマンガ・アニメーション」（京都精華大学マンガ学部）「マンガは今や世界の共通言語です」（名古屋造形大学先端表現コース・マンガクラス）『『クールジャパン』を科学する—世界が目する日本文化—』（明治大学国際日本学部）

そこに浮かび上がってくるのは「世界」と「日本」という枠組みであり、「我が国」のマンガやアニメに対する「国際的」な評価が掲げられていることがわかる。経済産業省をはじめとする省庁が、これらの振興を謳うときの常套句と、基本的には同じである。大学の学科新設の許認可権を国が握っていることに照らせば、マンガやアニメの学科化も、そうした国策としての一面を帯びているともとらえ得るだろう。

もともと日本における大学制度は、明治期に、黒船以降の圧倒的な外圧の下、西洋列強に対抗するための国家体制を構築する一環として欧米から移植されたものである。法・医・工・文・理といった学科構成、学位や教授職などのシステムは、基本的に欧米、とりわけドイツの大学から引き写されている。少人数制の演習を「ゼミ」と呼ぶ習慣に、その名残を見出すことができる。

旧帝大は、中央集権的な国家体制を担う官僚の養成機関であり、その他諸々の大学は、全国の労働人口を「実家」の家業から引き離してホワイトカラーに仕立て、会社組織に部品として供給するための工場を担ってきた。「勉強して良い大学に入り、良い会社に入り、出世して郷里に錦の御旗を飾る」という人生観は、そうした社会システムとともに日本の人口に膾炙したものである。いずれも欧米の産業経済に互していくという大義の下、そうした外圧

を政府が利用して実施してきた国策である。結果として日本は未曾有の経済成長を遂げ、産業技術立国となったが、その過程で地域のイエや共同体は解体され、街並みは歴史的な面影を喪い、欧米的な文化やライフスタイルの急激な流入が、それまでの伝統を断絶させた。大学はいわば、そのような近代化の装置の一つとして機能してきたのである。さらに大学とともに、図書館もまた、同様な歴史的な文脈の中で導入された装置である。「図書館」という言葉自体、明治期に英語の library を訳してつくられた和製漢語であり、その呼称が最初に採用されたのは、明治10年に設置された東京大学法理文学部図書館であったとされている。そして言うまでもなく、「国家」という概念をはじめ、さまざまな政府機関や司法・立法・行政制度自体が、そうした装置の最たるものである。

つまり、マンガ・図書館・大学・政府の四つの内、図書館・大学・政府は、舶来の権威を運用する外圧機関としての成り立ちにおいて通底している。これは何も、明治期の話にとどまるものではなく、21世紀の現在も根深く続いている。そしてその根深い構図は、マンガやアニメをこれら機関が扱おうとするときに、「世界からの評価」が援用される傾向に、端的に表れている。つまるところ、そこで扱われている、あるいは扱われようとしているのは、マンガやアニメというよりは、「世界から評価を受けているものとしてのマンガやアニメ」なのである。注意が必要なのは、そのような扱いが、マンガやアニメに強い外圧を及ぼしうる、ということである。

ここで、歴史をさらに過去まで紐解いていくと、日本は昔から外圧による文化の変転を幾度も反復させていることがわかる。「日本」という国号それ自体が、7世紀後半における唐の膨張がもたらした緊張により、急速に国家体制が整備される中で成立したものである。この時代には朝鮮半島から輸入された技術で西日本各地に防衛施設が築かれ、さらに舶来の宗教である仏教で国を安定させるべく、東大寺や大仏、国分寺などが、8世紀にかけて建立されていった。その間、遣唐使を通して唐の技術や制度、文化や仏教などが移植され続けた。国の中樞が、外圧を権力に換え、舶来の文化を権威に換えて運用することによって、日本という国は出現したのである。

ところが9世紀中頃から唐の国力が弱まると、日本では文化の重心が徐々に唐風から和風へと移り、9世紀末には遣唐使が廃止されている。海に囲まれた日本は、天然の鎖国状態となる。当時、識字層の間では中国渡来の漢字が用いられていたが、その漢字が平仮名へと崩され、日本語をストレートに表記することが可能になっていった。そして11世紀に入る頃には『枕草子』

や『源氏物語』といった日本文学の至宝が、女性を書き手として成立する。外圧の減衰とともに、数百年の時をかけて、中枢から外れた場で、文化が熟成される。日本の文化的達成には、そのような過程が見出せる。

一方、国風文化が発達すると、かつて国外から移植された技術は、それと反比例するかのよう退歩する。前述の東大寺と大仏は、12世紀に源平の争乱の中で焼失する。しかし日本の鋳物師や大工の技術は、当時、4世紀前に造られた大仏や大仏殿を再建することができなくなるまで後退していた。結果、今度は宋から渡来していた技術者の力と、宋の建築構法が導入されている。そして13世紀に蒙古による国外からの侵攻が起こると軍事的な中央集権化が促され、文化的にも宋や元の影響が強くなった。

しかし蒙古襲来から16世紀までの3世紀は、再び大きな外圧が不在となる。すると、中央に振れていた権力が地域へと分散し、それと併行して、茶の湯や茶室、能楽、龍安寺の石庭などを生み出す文化的に豊穡な時代が訪れる。16世紀になると南蛮貿易とともに鉄砲とキリスト教が日本にもたらされるが、それらが国内に強い緊張を引き起こした反動から、江戸時代には約200年間の鎖国に突入する。そしてその間、新たに独得の文化が発達する裏で、日本の軍事技術は火縄銃で停止したままになる。日本の文化と技術の歴史は、このように繰り返し外圧によって分節されてきた。

江戸の鎖国期には、歌舞伎や浮世絵に代表される庶民の文化が発展した。ここで注目すべきは、権力者によって支えられた狩野派を筆頭とする美術品よりも、当時は美術とすら見なされていなかった浮世絵の方が、後に国際的な影響を及ぼし、評価を得るにいたっているということである。世界の文化史を見渡してみれば、おおむね、権力が中央に集中し、その権力の強さが美術や建築に表現されることによって、代表的な文化的達成が生まれている。中国やフランスなどは、その典型である。ところが日本においては、権力者による外圧の運用が減衰した時期に、権力の中枢から外れた場で、文化の生産性が高まるという逆のパターンを描いている。外圧を受けると技術力が高まり、舶来の文化が権威的に運用される。そして外圧の減衰とともに、その国風化が起こる。これを現代に照らせば、秋葉原の店頭風景におけるエレクトロニクスからマンガ・アニメ・ゲームへとというシフトは、そうした日本文化史のパターンが反復される予兆とも読み取れる。

そしてまさにマンガやアニメは、今や政府や大学から、新たな国風文化のようなものと見なされはじめている。経産省が「コンテンツ産業」と枠付けてその振興策を検討する一方、文化庁や外務省、観光庁などは、マンガやア

ニメを、文化交流や海外からの旅行客を増やすための材料としてとらえるようになっていく。先に触れた「国立メディア芸術総合センター」の計画は、その一端だったろう。

しかし先述したように、政府や大学は、マンガやアニメを扱う際に、強い外圧をそこにかねないという根深い性質を帯びている。具体的には、海外で評価される「良いマンガやアニメ」とそうでない「悪いマンガやアニメ」という評価軸で、読者や視聴者、さらには作家の価値観を上書きするという事態を起こしかねない。あるいはすでに、起こしは始めている。「宮崎駿作品は優れているから米アカデミー賞を獲った」ということの喧伝は、「宮崎駿作品は米アカデミー賞を獲ったから優れている」という認識へと、容易に転化する。

ここで歴史から読み取るべきなのは、高度な文化的達成には、外圧が比較的緩やかな状態の下で、百年単位の熟成の時間を要するという点である。それゆえ、マンガやアニメの振興を目標に据えるなら、必要となるのは「世界からの評価」という外圧を無闇に注入することではなく、むしろマンガやアニメにかかる外圧を、適度にコントロールするための方法と戦略の構築である。昔は鎖国によって海が外圧を抑制したが、今は新たな方法論を要する。そしてそのような戦略の構築には、まず、膨大な資料に基づく実態や動向の基礎研究が必要となる。

他方、大学やその図書館でマンガを扱うことは、必ずしもその産業振興を目的とするわけではない。マンガは昭和時代から、国内で流通する雑誌や書籍の少なからぬ割合を占めるようになっており、国民の価値観や関心、生活を多角的に映し、記録する鏡となってきた。それゆえ、作家論や作品論といった、マンガそれ自体の研究にとどまらず、戦後の国民や社会の推移を扱う歴史学や社会学などにとっても、豊かな資料の採掘源となる。そのような幅広い学術研究に資し、同時にマンガにかかる外圧を最小限にとどめようとする場合、最善の方法は、まずは価値判断に基づく選書を極力廃し、メジャーなものからマイナーなものまで、上品なものから低劣と見なされるものまで、網羅的なアーカイブを構築することである。

そしてそのような研究インフラが整備されたとき、政府などが有効な振興策を打ち出すために必要とする基礎研究が、はじめて可能になるはずである。目下、そのようなインフラとなるアーカイブ施設を、準備している。※「東京国際マンガ図書館」（仮称）ならびに「米沢嘉博記念図書館」の詳細は下記ウェブサイトを参照されたい。URL：<http://www.meiji.ac.jp/manga/>